

ヨーロッパ美術散歩 第1回

松井健児(28機)

イール・ド・フランス

1840年代に築かれた城壁内がパリ旧市街である。これに接するブローニュの森やヴァンセヌの森は台東区の広さを有し、一日の散策やスケッチに好適な場所である。パリ近郊を含め首都圏に相当するパリ地方イール・ド・フランスにはロマネスク・ゴシック・ルネッサンスの各様式の教会・大聖堂・広大な森に囲まれた城や庭園が昔の姿のまま保存されている。フォンテーヌブローの森に近いバルビゾン村はミレー・ルソー・コロー・ドービニ等のバルビゾン派(自然派)の画家を生み近代絵画への大きな足跡を残した。

西北に流れるセーヌ川流域の各地では、オルセー美術館をはじめ世界中の美術館でもてはやされている多くの印象派の風景画が描かれた。

小生は現役時代には出張の合間に、退職後は毎年1~2ヶ月間気ままに各地を旅行し、水彩や油彩によるスケッチを行っている。絵を描いていると色々な人に話しかけられる。フランス人は概して社交的である。特に子供達が「ムシューのデッサンは素晴らしい」とか言う。買物籠を下げたおばさんが「幾らで売めるのか」と訊く。イギリス人や礼儀正しいフランス人は「見せてもらってよいか」と断り、お礼を言って立ち去る。写真を撮らせてくれるように頼み、OKすると無邪気に喜ぶアメリカ人にも時々会う。日本ではキャンバスの前にいきなり頭を突っ込んでくるお婆さんがいる。教養のなさそうなドイツ系のお婆さんも無礼である。集団で行動することを好む日本人やドイツ人は帰属集団外の他人や客以外には気を使わない。個人の独立性が強い国では、社会生活をスムーズにするための最低のエチケットが守られているのではないだろう

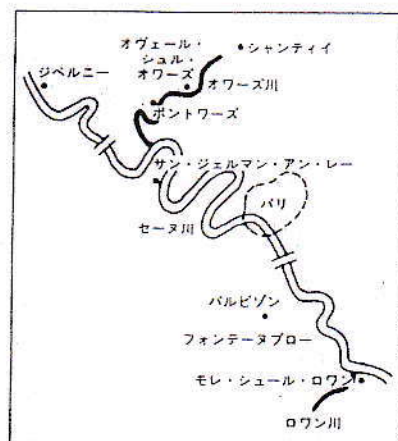
か。

ジベルニー

或る日パリから日帰りのバスツアーでジベルニーに向かった。乗客はフランス人・イタリア人・アメリカ人・日本人は私一人。フランス人とイタリア人はすぐ友達になる。イタリアはフランスにとって美術の先人であり唯一尊敬している国であることも関係あるかも知れない。日本人は気さくな米国人や北欧の人達と友人になることが多い。勿論言葉の問題も大きい。モネはこの地にセーヌ川から水を引き日本庭園とフランス式庭園を造った。四季の花で埋められた庭の一角にアトリエを構え、移り行く光の中の睡蓮を眼が殆ど見えなくなっても描き続けた。チュイルリー公園にあるオランジュリー美術館で、これ等の大作に浸りしばし時を忘れて人々に出会う。この美術館にはセザンヌ・ルノワール・ピカソ等の傑作も展示されている。

オヴェール・シュル・オワーズ

印象派の画家ピサロが長年住んでいたポントワーズのオワーズ川を見下ろす高台には、ピサロ美術館がある。ローカル線に乗り換えて間もなくオヴェール・シュル・オワーズの小さな村に着く。アルルでのゴーガンとの共同生活の夢が破れ耳切り事件を起こしたゴッホが最後の力を絞って数々の傑作を生み遂にピストル自殺で37年の生涯を閉じた地である。小生の属する美術団体の新年会のスピーチ



で或る有名な評論家が言った。「お見かけしたところ皆様はゴッホよりかなり長く生きておられるようですが、ゴッホのような素晴らしい絵を描かれる人は一人もおられない。」

あの有名な教会の絵と同一の構図でデッサンを試みたが、当然の事として極めて平凡なものとなった。現物は色も形もゴッホの絵と全く異なる。彼の精神がいかに高揚していたかを思い知らされた。すでに刈取りの済んだ麦畑にゴッホの絵の複製が立っていた。この風景からは想像できない絵である。非凡な才能は平凡な風景も緊張度の高い絵に変えてしまう。小生は重い絵具を背負って描きたい風景を求めて歩き廻っているが、描きたい風景はすでに心の中に存在しているのが本当かも知れない。弟テオと並んだゴッホの墓には夏草が繁っていた。

モレ・シュール・ロワン

1882年シスレーはモレに居を構えた。穏やかなロワンの流れ・美しいポプラ並木・水車小屋・美しい町並・教会等が彼を魅了した。川沿いのオーベルジュに宿泊し今でも当時の面影を残している運河、朝霧のセーヌ川等をスケッチした。並木を渡る爽やかな風の音はシスレーが聞いたものと同じであろう。

シャンティイ

パリ北駅から40分列車に乗り、駅前の森の小径を辿り20分程行くと競馬場の奥にシャンティイ城が姿を現す。16世紀から19世紀にかけて建てられたルネッサンス様式の建物は格好のオブジェである。ここの馬場は1834年の第1回公式競馬大会以来サラブレッドの中心地となった。ドーヌール公が蒐集した美術品は城内のコンデ美術館に展示されている。ラファエルの三美神・コシモの美しきシモネッタの肖像（ボッティチェルリのヴィーナスの誕生のモデルといわれる）・コローの田園の楽奏等々美術書で馴染みの絵が無造作に掛けられている。

サン・ジェルマン・アン・レー

グランアルシュで快速に乗り換え15分足ら

ずで駅に着く。全長2400mの大テラスからは木々の間にセーヌ川が見えヨットが浮かぶ。広大な森は所々に芝生と花園が造られている。夏の日差しを避けながら木々や草花を写生するのに好適な場所である。町から少し下った所にプリウレ美術館がある。ポン・タヴァンで活動していたゴーガンを中心に結成されたポン・タヴァン派のゴーガン・ベルナール・フィリジェ等の絵画及びナビ（預言者の意）派のドニ・セリュジェ・ボナール・ヴィヤールの油絵・ポスター等が常時展示されている。浮世絵の強い影響を受けたドニは、「絵画とは一定の秩序によって色彩で埋められた平面である」と断言した。彼等の絵は次第に装飾化し後期印象派やアールヌーボと同時期の10年間に飾った。

パリ

フランスの良さは田舎にあるが、入出国のためパリを通過する。セーヌ川越しのノートルダムやボージュ広場は幾度となく油彩でも描いてみた。在仏日本人画家やジョギング中の旅行者・買物途中の人々に話しかけられる。孫を公園で遊ばせている老人も多い。パリでの楽しみの一つはサン・ルイ島の古いレストランでパリ在住の友人達とタイムスリップした一時を過ごすことである。希ではあるが寿司屋に行くこともある。或る夕べ隣の席で二人のパリジェンヌがホークで格闘している。ホークで鮪の中央を突き刺し醤油皿に入れたのでご飯はバラバラ。それをホークで抄って食べている。たまりかねて指南をかって出た。おしぼりで手を拭いて指先でつまんで…。彼女達は一生懸命に真似するが仲々巧くできない。この黒い紙は海草でミネラルやビタミンが豊富だから貴女達がますます美しくなり世の男達をますます悩ますことになる…と言うと笑い出す。片言のフランス語ではキザに聞こえる心配はない。話題は両国の食生活から文化へと広がって行く。別れ際に交した握手の柔らかいぬくもりが何時までも残っていた。

ヨーロッパ美術散歩 第2回

松井健児(28歳)

フランス ブルゴーニュ地方
ディジョン

安売航空券でバンコック・フランクフルト経由でパリに向う。直ちにTGVでディジョンに到着。今回はパリ南東400kmに広がる葡萄畑、川と溪谷、高地と森林等変化に富んだブルゴーニュ地方が目的地である。カンバス50枚、油彩水彩用具一式、カメラと衣料を入れたカバンをキャリヤーに縛り付け引張って行く。大聖堂の横丁に手頃なホテルを見付け、ベルを押すとブロンドの中年の婦人がドアを開けた。日本人と知るや部屋の話はそっちのけにして、ボンジュールは日本語では何と言う？メルシーは？と矢継ぎ早に質問する。小柄で中々魅力的な顔をしているが、20年後は箒に跨って空を飛んでいる顔になるだろう。その明るい性格と部屋の条件が気に入り滞在することにする。ブルゴーニュ公国の首都であったこの町は人口16万の手頃な規模の都市である。エスカルゴとワインの本場としても名高い。大公宮殿の半分が美術館になっている。14世紀ジャック・ドゥ・ベルツ作の黄金色の精巧な磔刑の木彫の衡立、ロサンバ・カリエラ作の春(17世紀の可愛らしいセミヌード少女の油絵)、ティソットのジャポニズムの油絵、モローのヘラクレスと鳥の水彩、モネ・シスレー・ルオーの風景画、スタールの力強いフットボーラーと題する油絵等をはじめとして収蔵品は多岐にわたっている。郊外のキール湖に出て、木蔭の釣人と対岸の丘を油絵にする。ブルゴーニュ運河が緑の水を満々と湛え何処までも続く。並木に沿って自転車専用路も設けられている。流れに沿って町まで戻る。船溜で水彩を描いているうちに6月の永い日も暮れかけてきた。周りで世間話に夢中だったおばさん達も家に引き上げていっ

た。茜色の空が水面に映えていた。

ディジョン大学に学んでいる日本娘達と晚餐をする。月6万円の仕送りでやっている一人はレストランで食事をするのは初めてだと喜ぶ。教育費や基本生活費の安い国だから何とかやって行けるのである。

ボヌ

ディジョンから南へ200kmにわたって葡萄の丘が続く。ディジョンのホテルに荷物の一部を預けバスで出発する。ヌイ・サン・ジョルジュで途中下車。次いでボヌに到着する。池面に影を落すノートルダム塔の丘から見渡す雄大なパノラマ・初夏の陽に輝く葡萄畑を描く。15世紀に建てられた病院はブルゴーニュ特有のカラフルなスレート屋根を持つ。展示品にはロジェ・フォン・デル・バイデン作のフランドル派の細密画：最後の審判がある。ノートルダムでは中世からルネッサンス様式への移行を示す聖母の生涯を描いたタピスリーが印象深い。

マコン

マコンはトゥルニュと同じくソーヌ川の西岸に広がる。ローマ時代以来の要衝で、人口は4万人。郊外のマコネはマコンワインの産出地。その南に続く丘は日本でブームになったボジョレの産地である。朝霧に霞んだポプラ並木の後から陽が昇って来る。12世紀の面影を留めるサン・ヴァンサン塔に登ると町とソーヌ川を一望できる。第2共和国の外務大臣としてまたロマン派詩人として名高いラマルチーヌの記念館で、貴公子を偲んで静かな時を過した。

車で40分のソリュートレの岩山でスケッチしていると、恰幅のよい婦人が時々覗きに來た。この婦人は丘の上に小さく描かれた赤い屋根の家を指して、「これは私の家よ」と言

う。あまり嬉しそうなので少し大きく描き直してから、貴女と家と私の絵と一緒に記念写真を撮ろうと提案する。何処に立てばよいのかと子供のようにはしゃぐ。田舎では淳朴な人に出会うことが多い。

オーセール

ディジョンに戻るとホテルのマダムが暖かく迎えてくれた。女子大生達と別れのパーティをする。大学は休みは多いが大きなテーマの宿題が出され極めて多忙という。ホテルで毎朝会っていた小柄な物静かな婦人は夫の顔の癌手術の予後の看護のため滞在し、病院に通っていた。以前看護婦をしていたと言う。一日も早い退院を祈って彼女にも別れを告げた。ホテルのマダムとはプロバンス式の4回のキスで別れた。

オーセールはヨンヌ河畔の高台に数多くの塔を見せて私を待っていた。制作意欲が湧いてくる。ホテルのマダムは初老の心優しい人である。日本の音楽家に知人が多い。夫が絵を描き画家の友人も多いと言う。食堂に点描法と表現主義を組合せたジョルジュ・オゾットの現代風景画が掛けられている。常連客の一人85才のベルギー人アコーディオン奏者がマダムの要請により一時間以上にわたって世界の音楽を聞かせてくれた。

ヴェズレー

オーセールに荷物を残しヴェズレーへ。9世紀に建てられた修道院に端を発する人口600人足らずの宗教の町である。丘を登りつめた所にロマネスク様式のマドレーヌ寺院が古色蒼然と立っている。マグダラのマリアの遺骨の傍で感激の涙を流す信者を見掛ける。寺院の周囲は広大な公園とテラスになっており、黄金色の麦畑が地の果まで続く。点在する緑の森・教会・赤い屋根の集落・刻々と影を移動する雲。突然の驟雨に、塗りたてのキャンバスを持って教会に飛び込む。雲の動きを計りながら雨宿りと制作を繰り返す。

丘を下りると刈られるのを待っている麦畑

に真紅のひなげしが揺れている。遠くの村から教会の鐘が聞こえてきた。

ヌベール

ロワール河畔に位置するオーセールを小型にしたような美しい町である。キャンプ場で河畔に聳える教会を描いているとキャンパー達が声を掛けてくる。7月の太陽は強烈になっているが木蔭は寒いくらいである。川上ではカヌーのレースが行われている。この年のバカンスシーズンもたけなわに近づいてきた。

遠雷に絵筆速める夏山河

夕立に駆け込む堂のマリア像

涼しさや大聖堂の音楽会

連載「ヨーロッパ美術散歩」について

会誌に文化の香も漂わせたい。これは会誌を大型化した時からの願いであった。そこで東工大の卒業生で組織する蔵前絵画会の幹事の一人、松井健児氏(28機)と相談した。単なる旅行記では困る。どうせやるなら連載にして会員の絵画知識の向上に役立つものにしたい。松井氏は蔵前絵画会の幹事団とご相談され、結局絵画知識の向上という大役はお引き受けできないが、8回を通してフランスを中心に写生地を紹介し、気楽に絵画にも触れてゆくということで引き受けられた。

ヨーロッパ美術散歩についてご担当願う松井氏は、公募展・旺玄会の会員であって、グループ展も主催している。毎年ヨーロッパに滞在して作品を製作し、東京で個展を開かれている。

蔵前絵画会は、毎年一回蔵前工業会館で展覧会を開催する外、春・秋のスケッチ旅行及び不定期の研修会を行っている。現在会員数50名。在校生・卒業生及びその家族は年会費¥2,000を納めれば会員となれる。幹事長は岩堀英太郎氏(18染)、展覧会代表幹事は小松一郎氏(19機)。広く会への参加を呼び掛けている。
(編集委員会)

ヨーロッパ美術散歩 第26回 (最終回)

松井健児 (28機)

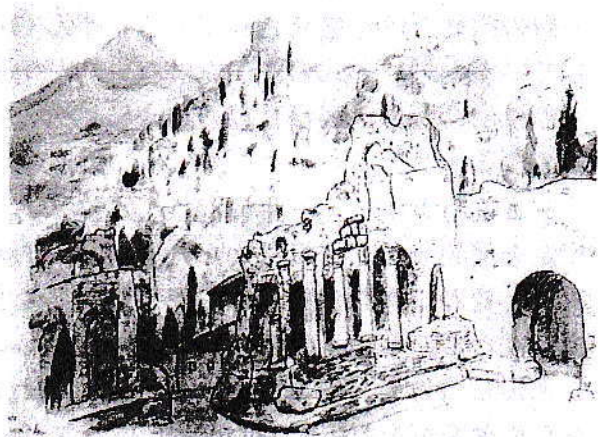
イタリア 第5回

シチリア

'99年6月5日パスポート盗難証明書をローマの日本領事館に持参すると、超イタリア美人に迎えられた。友人の証明があれば明日再発行できると流暢な日本語でいう。今夜シチリアに出発するので、15日に取りに来る旨告げた。アリベデルチを言うと「お気を付け遊ばせ」と。なんと優しい言葉だろう。パスポートを盗られるのも悪い事ばかりでもない。

パレルモ行き寝台車はコンパートメントごとに洗面器が付いている。車掌がパスポートを預かると回ってきた。君達の仲間に強奪されたから持ってないと慫慂として英語で言ったが通じない。警察の証明書を見せると納得した。海峡を渡ったのも気付かないうち朝9時パレルモに到着した。

古代ギリシャ人は、人口増加の解決法として若者を国外追放し、植民都市を作らせた。本国からの援助がなかったから、それぞれの都市は独立し、ギリシャ帝国は生まれなかったが文化は各地に広まっていった。前8世紀以降シチリアに植民都市が築かれ、次にやってきたカルタゴもやがてローマに滅ぼされ、



タオルミーナ野外劇場 (水彩)



島はローマへの農産物供給基地となった。6世紀にはビザンチン帝国の領土となり、9世紀にはアラブ人によってイスラム文化が導入された。

パレルモ

フェニキア人によって築かれ、イスラム・ノルマン・ゴシック・ルネサンスなどの様式が渾然一体となっているこの町を、ゲーテは「世界で最も美しいイスラムの町」と書いている。東洋と西洋が出会った町という点でイスタンブールに似ている。手頃なホテルが直ぐ見付かった。一人で町に飛びだします新港に行く。西は聳えるモンテ・ペグリーノ、東はザフェラノ岬に守られた天然の良港として今日まで繁栄を保ってきたのがうなずける。気温は33℃、僅かな日陰を見つけてスケッチを試みる。近くの植物園は改装中で入場できないので、メインストリートを上り、アラブ風のヌオーヴァ門、豪華なノルマン王宮を見し、パラティーナ礼拝堂に入った。黄金のモザイクの輝きはラヴェンナに匹敵する。キリストの洗礼を主テーマにしているが、天井と柱のアラブ模様に違和感はなく豪華さを増幅している。

次の日は、州立考古博物館を訪ねる。前6世紀初期のセリヌンテ神殿から出土した古代



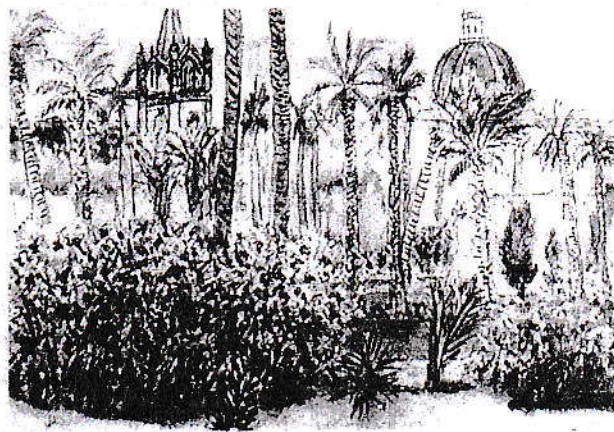
パレルモの公園（水彩）

ギリシャ美術品をはじめ、カルタゴの石棺・エトルリアの遺物・ローマのモザイク等が展示されている。職員の私語がうるさいが、客が少ないのでゆっくり時を過ごせる。シチリア地方美術館ではメシーナ作の受胎告知の新鮮さに心地よい感動を覚えた。午後はタクシーに郊外を案内してもらおう。運転手は人の良さそうな若者。8 km離れた高台にある12世紀のノルマン建築の傑作モン・レアーレ大聖堂は眩しい黄金のモザイクで埋め尽くされている。中庭を開くアラブ風の回廊では一對の円柱列が素晴らしい美観を提供している。ここからの眺望は、時間があれば油絵の大作にしたいところである。幼女ロザリアの眠っているカプチン・カタコンベでは、幾千の黒装束の遺体が壁に吊るされ、歩くうちに体が冷え切ってしまった。

マルトラーナ教会とサン・カタルド教会は隣接して12世紀に建てられ、前者は正面がバロック、内部がビザンチンの美しいモザイクで、後者は3つのアラブ風のドームを持つ特異な教会建築である。日本の四国より大きいこの島を効率よく巡るため、この運転手に主要地を案内してもらおう事にした。

セジェスタ

8日8時ホテルを発ったタクシーが海岸線から内陸に入り、乾燥した高原の道を突っ走っていくと一段高い場所に忽然ドーリア式のギリシャ神殿が現れた。紀元前430年に古代ギリシャ人によって建てられ、全ての柱が復



パレルモの公園（水彩）

元されている。さらに山を上ると半円形のスタコラ劇場跡がある。交通機関のない時代に、よくこのような山中に都市国家を作ったものだ。遥か下に神殿を望み、360度見渡せる丘陵地帯が海まで続いている。

セリヌンテ

一路南下し、南海岸を望む丘の麓に着いた。巨大な三つの神殿が並んでいる。日照りの中を大勢の観光客が神殿に向かって上って行く。僅かな日陰を見つけてスケッチに取り掛かる。最もよく復元された神殿Eと巨大な角石を描く。前5世紀にヘラに捧げられて建てられたという。極めて重厚な感じがする。ここは西部シチリア最大のギリシャの植民都市であったがカルタゴによって短い歴史を終わり、次いでローマ軍により破壊された。

アクロポリス

一つの山が累々たる石塊で覆われたアクロポリスは海岸の断崖の上に在った。神殿Cに一系列の円柱だけが復元されている。ずんぐりしていてドーリア式の優美さはない。左手遠くの砂浜に海水浴客が豆粒のように見える。

タオルミーナ

9日7時タオルミーナに向けてタクシーは疾走を開始した。今日はかなりの遠出である。次々と変わる海岸の景色がやがて乾燥した丘陵に変わる。草地・象の皮膚に似た藪の多いむき出しの地面・疎らなオリーブの林。オレンジや葡萄畑を見ると心が和む。タオルミーナは海際の断崖の都市である。時々雨が降っ

てきてあいにく視界が悪い。結局古代ギリシャ野外劇場でスケッチする。ゲーテも感動したこの絶景が、雨で台無しである。エトナ山が見えない。眼下の海面すら鮮明ではない。前3世紀に作られたが後にローマ風に変形された。ギリシャ人は高尚な悲劇を好んだが、ローマ人は単純で野蛮なものを楽しんだことが建築や彫刻にも表れている。雨はいよいよ強く、帰途寄ったエトナ山では黒々とした山頂がおぼろにしか見えなかった。

アグリジェント

10日は島を縦断してアグリジェントに行く。左手は海まで続く斜面、前方の雄大な町並みがけて陸橋を渡って行くと、神殿群が目に飛び込んできた。前6世紀ギリシャの植民都市として造られ、前406年カルタゴに敗れるまで繁栄が続いた。最も保存状態のよいコンコルディア神殿を8号の油絵に、ヘラクレス神殿を水彩で描く。低いアカシアの枝に傘を渡して日陰を作った。4つの神殿が一本の道に沿って建っている。博物館を見学してから一路パレルモに戻った。友人は疲れたから食べに出ないという。レストランが開く8時まで待ってられない人に付き合ってきてまだシチリア料理に出会ってない。チャンス！と探しに出ると、旨そうな店がいっぱいある。ヴェネチア生まれの元気な女主人の店に飛び込んで新鮮な魚を満喫した。

チェファル

11日朝7時駅に行くと、まだ窓口が開いていない。インフォメーションに行くと、窓口に行けという。閉まっているという、車内で買えるという。車掌に車内で買えるか確認すると、駄目だという。歩き回っているうちにやっと窓口が開いた。こっちは開いた口が塞がらない。下車駅から右手に海岸に沿ってしばらく行くと海に突き出た山に行き当たった。写生道具を置き、山道をぐんぐん上って行くと、ダイアナの神殿跡に出た。殆ど原型を留めていない。眼下の紺碧の海に張り出した町並みの美しさはこの世のものと思えない。

描きたい衝動に駆られるが、断崖から身を持ち出さなければ町が見えない。友人が待っている場所まで戻って、この日は油F8と水彩を描いた。

エリーチェ

12日は列車で西端の町エリーチェに出掛けた。トラッパニ駅で降りバスの事務所に行くと皆居眠りしている。バス便が悪いので、エリーチェまでタクシーにした。海は茫々として期待したアフリカは望めない。夜、パレルモの豪華な庭園レストランで、友人と最後の晩餐をした。明日からまた自由な一人旅が始まると思うと心が弾んできた。

終わりに

64才から8年間、毎年1乃至3ヶ月フランスをはじめヨーロッパ14カ国、アフリカ4カ国その他を、宇宙に浮かぶ奇跡の星の美しさに魅了されながら、スケッチ旅行をしてきた。人類の歴史は殺戮と略奪の連続であるが、先人が残した芸術作品こそ霊長類としての証ではないだろうか。シーザーやナポレオンの道を歩いている時より、ゲーテやロマンローランが見た同じ風景に出会ったときの方が興奮する。ミレーやシスレー、ゴッホ等々が描いた景色が残されているのがたまらなく嬉しい。人類の一人としてこの世に生を受ける事ができた奇跡を噛み締めながら、健康な限り放浪スケッチ旅行を続けてゆきたいものである。長い間拙文を読んで頂いた方々に心から感謝申し上げ、キーボードから失礼する。

現在まで写生に訪れた国・場所

スウェーデン デンマーク オランダ
ベルギー スコットランド 英国
ウェイルズ ドイツ オーストリア
スイス ハンガリー チェコ
フランス スペイン イタリア
トルコ ギリシャ モロッコ
エジプト タンザニア ペナン
シンガポール 香港 天津 北京
台中 タヒチ ハワイ 米国 カナダ